

<書評>

丸楠恭一『「日本の役割」の論じ方 ——「トリックとしての国際貢献」をめぐる』 (彩流社、2010年3月、440頁)

Kyoichi Marukusu, *"Nihon no Yakuwari" no Ronjikata: "Torikku toshiten no Kokusai Kouken" womegutte*, Sairyusha, March 2010, pp. 440.

大山 貴稔

Takatoshi OYAMA

戦後日本のナショナリズム

戦後の日本においてナショナリズムは嫌忌されてきた。戦前の国家主義を取り除こうとしてきた故であろう。そのため、戦後長らくの間、国家への忠誠を煽るような露骨な言説は後景に退いていた。こうした事情も後押ししたのだろうか、戦後日本のナショナリズムを捉えた論考は存外に少ないという印象である。

そうした中、小熊英二による『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』(新曜社、2002年)が稀有な労作として脳裏に浮かぶ。敗戦後の荒廃から「戦前」の生活水準を回復させるまでの「第一の戦後」期(1945～54年)を軸に据え、55年体制と経済成長に象徴される「第二の戦後」期(1955年～)との思想的断層を浮き彫りにした大著である。忘却の彼方に葬られてきたナショナリズムの様相を剔抉して、現代に蔓延する戦後イメージの匡正が図られている。

小熊の議論を踏まえると、冒頭の記述は「第二の戦後」期以降の言説を前提としていることになる。この「第二の戦後」期——とりわけ日本が世界有数の経済大国となった1980年代以降のナショナリズムは殊に描き出されてこなかった。経済成長による繁栄を謳歌していた時代であり、ナショナリズムを想起させるような苛烈な言辭は稀少だったのかもしれない。だが、こうした時代にも時勢に即した「何らかのはけ口」(13頁)があったと見るのが本書である。発現のあり方を変えつつも、ナショナリズムが政治論議の底流を成していたと捉えられている。

本書では「世界の中の日本の役割」論(「役割論」)が分析の糸口とされている。「国際社会の中で日本はどのような位置づけにあり、何を求められており、どのように振る舞うべきか」を論じることで「ナショナリズムを表現していたのではなかったか」という視点である(13頁)。そして、この「役割論」の極致として、1990年代初頭に流布した「国際貢献」概念が位置づけられている。同概念に連なる「役割論」の系譜を跡づけて、そこ見て取れる心性を炙り出そうとした著作と言えるだろう。

ナショナリズムをめぐる屈折した心性は「つむじ曲り」¹⁾などと形容されてきたことがある。だが、その内実を捉えた著作はごく僅かなのではなからうか。1980年代以降に本格化した「役割論」に目をつけて、その構図と含意を明瞭にしたところに本書の意義が感じられる。

1) 高坂正堯「つむじ曲りのナショナリズム」『諸君』第4巻・第8号、1972年8月、22-37頁。

「日本論」を捉える／目指すための視座？

——第1部『『日本』はどう論じられてきたか』をめぐって

では、「役割論」はどのような視座から読み解かれたのだろうか。まず、「役割論」を「日本論」（日本を論じる試み）の一形態として捉えていくことが明かされる（第1章「世界の中の日本の役割論」）。その上で、「日本論」を捉えるための4つの視座——知識社会学的視座・歴史的視座・国際文化論的視座・オリエンタリズム的視座——が丁寧に解説されていく（第2章日本を論ずる視座）。

「日本論」というのは世に流布していた言説の類型である。主に知識人によって形式が与えられ、同時代の社会的知識のあり方に影響を与えてきたとされている。このような言説の生産・流通・消費の過程に目を向けるのが知識社会学的視座である。「日本論」という知識が浸透したことを社会文化的現象として俎上に載せ、その背景や含意を鮮明にすることに著者は関心を向けている。

また、このような言説は歴史的文脈を汲むものである。そこには歴史的に生成された固有性を見て取れることもあるだろう。この固有性に着目することを歴史的視座と著者は呼ぶ。この視座を採るにあたり、近代化という歴史的体験にとりわけ重きが置かれている。近代化の過程で「非西洋のフロントランナー」と自らを位置づけてきたこと、そして翻訳抽象語を用いて知的営為を行ってきたことが現代まで尾を引いているというのである。

続けて、「日本らしさ」なるものは動態的に捉えられるべきだと述べられる。これが国際文化論的視座と呼ばれる姿勢である。異文化との接触により、「日本らしさ」をめぐる言説が変容してきたことに目がつけられている。そこでは外来の要素と旧来の要素を融合する傾向が強かったという。戦後の日本で「総合」（「総合安全保障」など）という政治言語が好まれた背景としても理解されているようである。

そして、西洋なるものが国際比較の価値尺度となっている点にも留意されている。西洋的価値観が広く浸透した結果、「オリエント＝東洋」側の自己理解に際しても「オクシデント＝西洋」の影響は抜き去りえないというのである。こうした問題意識がオリエンタリズム的視座と呼ばれている。西洋を比較の軸に据えた「日本論」は無論のこと、社会科学という学知のあり方も西洋的価値の規範性を補強してきたと説かれている。

以上は第1部『『日本』はどう論じられてきたか』の概略である。先行研究を参照しながら各視座の輪郭が浮き彫りにされている。そうした中、特に印象に残るのが社会科学に向けられた批判的な視線である。科学性や法則性が過大視されることに違和感を懐いているようである。日本の現象を取り上げる場合、人文社会科学の諸理論から「残された部分に本質が潜んでいる」とも著者は述べる（26頁）。

著者曰く、「日本論」とは「日本を研究対象とし、社会科学の方法に一定以上則りながらも、当該学問分野の『約束事のセット』の限界をも併せて意識し、その限界に対して何らかのアプローチを試みることを含意とするような学問上の姿勢」のことである（35頁）。先の社会科学批判を踏まえると、これは単なる分析概念としての定義に止まらないようにも見える。どうやら著者自身の学問的志向も「日本論」に向けられているようである。

「役割論」の系譜

——第2部「1990年代初頭の『日本の役割』論の再検討」をめぐって

以上の視座を基底に据え、「国際貢献」概念に連なる「役割論」の系譜が跡づけられていく。「役割論」を「日本論」の様式と位置づけた上で系譜を辿る試みであり、それ自体が新たな「日本論」を志向する試みでもあるのだろう。

「役割論」の系譜を跡づける記述に先立って3つの分析視角が示される。「日本社会に関する肯定

的認識度の強さ」・「日本の異質性・特殊性に関する自己認識」・「オリエンタリズム的視座の強さ」という視角である。併せて「国際日本主義」・「大日本主義」・「小日本主義」という「役割論」の理型も提示され、その系譜を描き出す際の基準点が明確にされている（第3章「役割論」に関する考え方の枠組）。

こうした整理を踏まえた上で、まずは1945年から1970年代にかけての前史が描出されていく（第4章 先行する時代の考察 (1)「小日本路線」の確立とそれをめぐる諸議論）。国内外の情勢に触れながら、1960年代半ばまでは「小国主義」に近い議論であったと指摘される。1960年代半ば以降は「役割論本格化の兆し」が看取されている。経済成長に伴う日本の肥大化が「本格化」を促していたようである。

続いて、1980年代の「役割論」の本格化に焦点が当てられる（第5章 先行する時代の考察 (2)「小日本路線」からの本格的脱却をめぐる諸議論）。アメリカの国力が相対的に低下する中で、「小日本主義」路線に対する国内外の批判の高揚が浮き彫りにされていく。第1節では大平正芳政権期（1978-80年）の「総合安全保障」論を、第2節では1980年代初頭の総合雑誌の様相を組上に載せ、「国際日本主義」的契機を孕む過渡期の議論が詳らかにされている。

そして、第3節では中曽根康弘政権期（1982-87年）の「国際日本路線」の進展が取り上げられる。オリエンタリズムの視座を意図的に封印し、日本の国際的責任を普遍的妥当性の観点から強調するという中曽根の特質が抉り出されている。日本の特異性や異質性を弁明する議論は退けられ、自らを価値尺度の側に位置づける傾向が強まっていたという分析である。「長波理論」や「覇権安定理論」といった同時期の学術論議と表裏一体の関係にあったことも示唆的に記述されている。

こうした文脈を踏まえながら、「国際貢献」概念が検討されていくことになる（第6章 1990年代初頭の考察）。まず、1990年代初頭の国内外の状況が第1節で整理される。冷戦の終焉により、アメリカでは日本異質・特殊論が強まっていた。これを受けて「普遍性」や「国際性」の下に特殊日本的要素の修正を図る新保守主義が日本でも台頭してきていた。湾岸危機・戦争がこの流れを決定づける契機となり、保革ともに反対しづらい「枕詞」として「国際貢献」概念が広まったと解釈されている。

第2節では「国際貢献」概念が分析の中心に据えられる。1980年代の「責任分担論」との連続性が指摘され、同概念の基底を成した相互依存論的世界観が炙り出されている。米ソ対立の解消により、日米同盟路線と国連中心主義が両立可能に見えた時期である。こうした状況下で、恣意的に利用する「玉虫色の政策造語」として定着したのが「国際貢献」概念だったという。

最後に、以上を踏まえた「暫定的結論」が述べられている（終章 暫定的結論——「役割論」の意図せざるトリック）。湾岸戦争を「役割論」転換の契機と視る一般的見解とは異なり、その時期の言説を1970年代後半以来の流れの中で捉える見解が示されている。オリエンタリズムの視座が「国際貢献」論の底流を成していたことを看取して、その点における過去との連続性を重視した解釈と言えるだろう。また、「役割論」の能動的な性格についての言及もある。日本の特殊性を国内外に向けて糊塗すると同時に、それを積極的に意味づける手段主義的ナショナリズムとしても機能していたと著者は言う。こうした言説は当時の米国政府関係者にも読み解かれていたはずである。このことを念頭に置いて、「役割論」が日米関係に及ぼした影響も試論的に綴られている。

「日本論」を目指して

このように、興味深い見解が多々鏤められた著書である。だが、個々の見解に目を向けると論拠が不十分に見える箇所も幾らかある。その多くは本書の議論の組み立て方、延いては「日本論」の目指し方と絡んでいるように思われる。

例えば、本書は分析視座の説明にかなりの紙幅を割いている。確かに日本の対外政策研究において類似した関心は少ないが、人文社会科学を見渡せば決して特異な視座ではない。寧ろ丁寧に説明されたことで、そこに記された問題意識と描出された系譜との乖離が目についた。先行研究の解説や敷衍を通して各視座の意義を説くよりも、それらの有効性を際立たせる形で「役割論」の系譜を描いた方が効果的なように感じられる。

というのも、社会科学批判を著者は度々述べている。過度な法則志向に違和感を懐いているようである。だが他方では、先行研究が抽出した見解を一般化して敷衍することにより、解釈の根拠が不鮮明なまま論じられている部分も散見される。資料に語らせる論述スタイルを採り、その中で敷衍する見解の妥当性を示唆できれば一段と説得的になりえたのではなかろうか。とりわけ言説が能動的性格を帯びていく過程が跡づけられていたならば、本書で提示された諸種の論点は更なる迫力を帯びていたに違いない。資料を解釈の基底に据え、そこから論点を抽出する作業こそが著者の「日本論」的問題意識にも適っていたように思われる。

とはいえ、冒頭に記した本書の意義は減じない。ナショナリズムの一形態として「役割論」を捉えたこと、「国際貢献」論議を1970年代後半以来の延長線上で捉えたこと、そして「役割論」に内面化された西洋的な価値尺度を捉えたことは本書の大きな特徴である。解釈の裏づけ方については多少の違和感が残ったが、本書の中には示唆に富む断片が多数煌いている。著者が提示した問題意識や論点には発展の可能性が秘められていると言えるだろう。